



2024年6月27日放送

日薬アワー 令和6年能登半島地震への日本薬剤師会の対応 および支援活動について

日本薬剤師会
常務理事 山田 卓郎

初めに、この度の能登半島地震により犠牲になられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に謹んでお見舞い申し上げます。被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

今回の震災発生は元日でしたが、地震発生直後に当会会長である山本信夫を本部長として災害対策本部を立ち上げ、被害が想定される4県（福井、石川、富山、新潟）の各県薬剤師会の会長と直ぐに連絡を取り、また被害が大きい石川県薬剤師会とは2日午前中に同県薬の災害対策本部で緊急に開催されたWeb会議に担当役員である私が参加をし、現状把握と情報共有を行いました。同時にモバイルファーマシーの出動要請と、派遣薬剤師の募集準備を開始しました。今回の震災は能登半島という地形的な制約があり、建物の倒壊による被害が大半を占めていましたが、何より道路の被害が大きく、自衛隊ですら被災地に到着するまでかなりの時間を要し、被災地薬局の被害状況は被災県薬剤師会としても、発災直後は状況把握がほとんどできませんでした。1月6日に石川県薬剤師会災害対策本部に私が先遣隊として派遣をされ、被害の状況確認と今後の対応について協議をしましたが、この時点でも詳細な被害状況は把握ができておらず、これまでと同様の支援で対応が可能であると考えていました。

これまでの災害発生時における日本薬剤師会としての被災都道府県薬剤師会に対する支援は、主に全国からの支援薬剤師の募集と派遣が主体でありました。ところが各地の状況がわかるにつれて、被害の大きさが見えてきたことと、石川県薬剤師会からの支援要請もあり、日本薬剤師会として初めて現地対策本部を設置することとなりました。まずはこの現地本部の設置が今回の支援活動における大きな特徴の一つであると思います。1月9日に日本薬剤師会から担当役員である私と災害対策委員会委員2名が石川県薬剤師会災害対策本部内に日本薬剤師会金沢本部を設置し、支援薬剤師の派遣調整やモバイルファーマシーの出動

要請と派遣先の調整業務、活動に使用するレンタカーの管理等を担当することとしました。

震災発生時から初の現地本部設置までの活動で感じたことは、いかに早く関係者と連絡を取り、安否および状況の確認、そして情報共有ができるか、平時からの連絡体制の構築と整備が重要であることを痛感しました。私自身も元日の夜に石川県薬剤師会の中森会長や災害担当の綿谷副会長と直ぐに連絡を取り、翌日の Web 会議に参加できたことが今回の支援活動における大きなポイントの一つだと感じています。

金沢本部として先ず解決すべき問題は、派遣薬剤師の宿泊拠点の確保でありました。金沢市内から半島被災地への移動となると、道路の状況と渋滞により、最大で半島中部の穴水地区まで片道 4 時間、半島北部の珠洲地区までは片道 9 時間の移動を要しました。この問題解決には石川県薬剤師会役員の方々からの提案により、半島入り口にあたる羽咋市柴垣町の「国立能登青少年交流の家」に中森石川県薬剤師会会長から直接交渉をしていただき、50 名以上の宿泊を長期にわたり確保していただき解決することが出来ました。これにより珠洲地区を除く 4 地区（穴水、輪島、門前、宇出津）への支援は、この施設を拠点として日帰りで可能となりました。

日本薬剤師会スキームによる支援薬剤師派遣は 1 月 10 日から開始されましたが、翌 11 日から施設の利用を開始し、併せて宿泊の部屋割りや支援の出退時間の管理等の業務のため、「国立能登青少年交流の家」に日本薬剤師会柴垣現地本部を設置しました。柴垣現地本部の開設時は日本薬剤師会スキームに応募していただいた京都府薬剤師会の支援薬剤師に運営を依頼しておりましたが、1 月 13 日から 2 月 15 日までの一ヶ月以上の長きにわたり、大阪府薬剤師会のご協力により、ロジスティクス要員として 2 名を切れ目なく派遣をしていただきました。柴垣現地本部の運営は、半島部で最後まで派遣を続けていた珠洲地区での支援終了 3 日前の 3 月 6 日まで続きましたが、1 月後半からは日本薬剤師会事務局より交代で職員も派遣しました。珠洲地区に関しては、日帰りでの支援活動が無理なため、車中泊や珠洲健康増進センター内での宿泊対応でしたが、のちに能登町にある「県立能登少年自然の家」での宿泊が可能となり、支援薬剤師の負担を減らすことが出来ました。宿泊拠点の早期確保が支援活動を円滑にすすめるために、如何に重要であるのか今回改めて認識をしました。

今回のもう一つの大きな特徴は、複数のモバイルファーマシーの長期間にわたる派遣であります。これまでの震災の場合は、被災地域の大規模な避難所に「救護所」と「調剤所」が設置され、支援薬剤師が災害処方箋による調剤業務等を行ってきました。しかしながら今回の震災では道路の寸断が多数発生し、孤立した集落がいくつもあつたこともあり、大規模な避難所が無く、規模の小さな避難所が多数開設されたため、避難所内に「救護所」が設置されず、必要となる医療支援は、医療チームによる「避難所以外に開設された救護所」および「巡回診療」での対応が主体となりました。被災地において救護所や巡回医療チームから発行される災害処方箋の調剤業務は、救護所近くに固定の臨時調剤所を設置して対応することが基本となりますが、今回の震災では発災直後は救護所が開設されなかったため、調剤所としての場所の確保が直ぐには出来ず、固定の調剤所を設置するまでの“つなぎ”として

複数のモバイルファーマシーでの支援が必要であるとの結論に至りました。モバイルファーマシーは石川県保健医療福祉調整本部と石川県薬剤師会との協議により決定された 5 地区（穴水、輪島、門前、能登町、珠洲）に、延べ 13 台を 50 日間にわたり継続して派遣をしました。モバイルファーマシーが派遣されている 5 地区には、日本薬剤師会スキームによる支援薬剤師が、柴垣の現地本部のある宿舎を拠点として、モバイルファーマシーや臨時調剤所での災害処方箋の調剤の他、各避難所での一般用医薬品の管理や環境衛生の管理、JMAT 等医療チームへの帯同、現地保健医療福祉調整本部での各種会議への参加等、支援活動は多岐にわたり、派遣地区によっては早朝 5：00 過ぎに出発し、夜は 20：00 過ぎに宿舎に戻るチームも数多くありました。日本薬剤師会スキームでの派遣は、1 月 7 日～3 月 31 日までの 85 日間で延べ 2,395 名、石川県薬剤師会のスキームも加えると 延べ 4,701 名にもおよぶ多くの皆様にご支援をいただきました。モバイルファーマシーそして支援薬剤師の派遣にご協力をいただいた、全国の都道府県薬剤師会等の関係者の皆様に、心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

以上のように本会では初めて現地本部を設置し、石川県薬剤師会と連携して二ヶ月以上支援活動をサポートしてきました。現地本部入りした本会メンバーは、被災地域の医療体制、つまりは地域における医薬品供給体制を 1 日でも早く平時の状態に戻すための支援を心掛け、日々活動を行いましたが、本部ロジスティクス業務や災害薬事コーディネーターの必要性和重要性、そして関係各所との情報共有と連携の大切さを痛感しました。災害薬事コーディネーターの配置が「都道府県において任命された薬剤師」と厚生労働省から示されましたが、まさに今回の各保健医療福祉調整本部での業務が災害薬事コーディネーターとして担うべき活動であると思われま

す。災害の形はもちろん毎回同じではありません。その時の状況に応じた判断と対応を必要とされますが、今回の支援活動での経験を活かし、今後の災害薬事コーディネーターの配置と養成、そして本部ロジスティクス要員としての日薬災害対策委員会の強化に取り組んでいきたいと考えています。今後とも皆様方のご支援とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。